児童・生徒の様子

「学力差が大きい」と感じている教員は９割超
児童・生徒と「話したり相談したりできる関係」は８～９割

児童・生徒の「学力差が大きい」と考える教員は、小・中・高校ともに９割を超えている。また、学校段階が上がるほど、「粘り強く考えようとしていない」「知識・技能が定着していない」「学習習慣が身についていない」などの比率が高い（図３－１）。一方で、「学級のまとまりがない」は高校でも２割台、「教員と児童・生徒が気軽に話したり相談したりできる関係である」は高校でも8.5割以上で、学級のまとまりや関係性に課題を感じている教員は少ない傾向にある（図３－２）。

Q あなたが担当する教科の授業で、次のことをどれくらいそう思いますか。

図3－1　児童・生徒の様子（2023年）

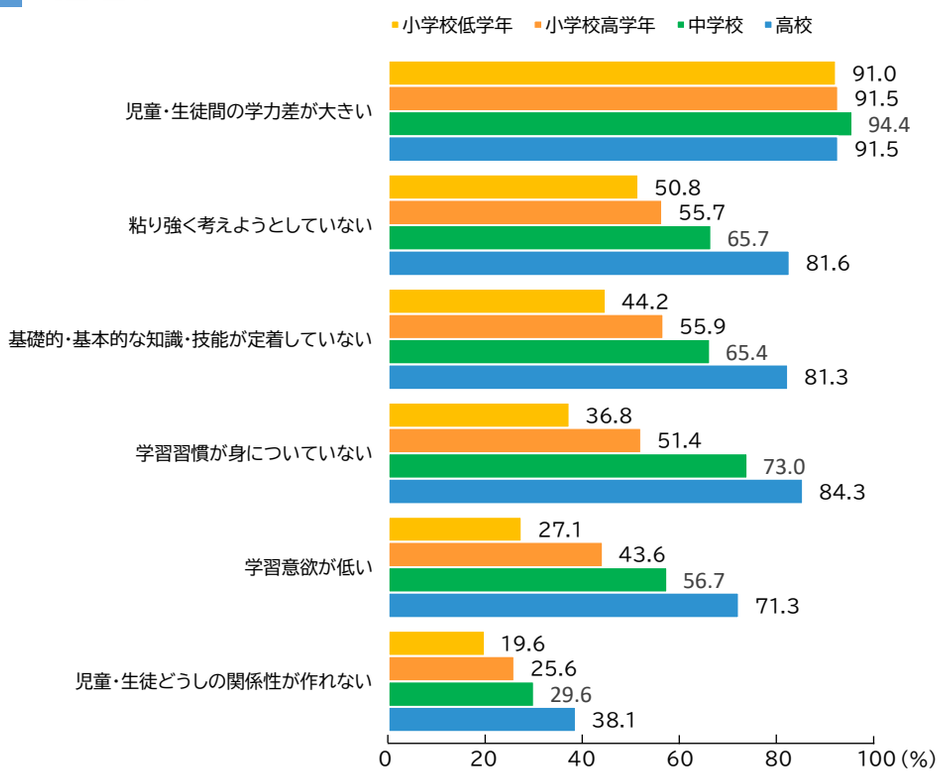
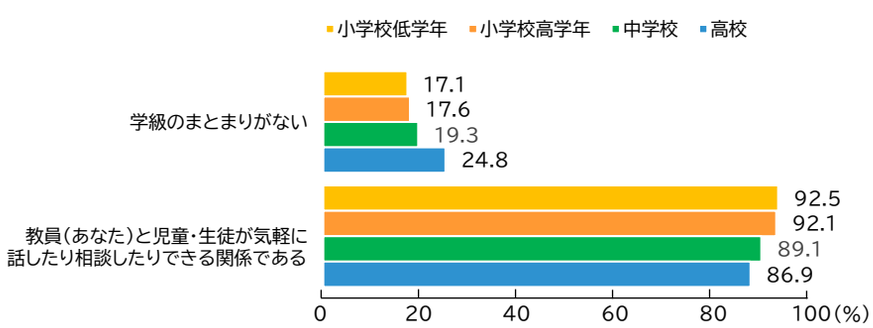


図3－2　学級の様子・教員との関係（2023年）



※同様の項目を2022年にも尋ねているが、尋ね方（Q）が異なるため比較していない（図３－１）。
※「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％（図３－１、図３－２）。

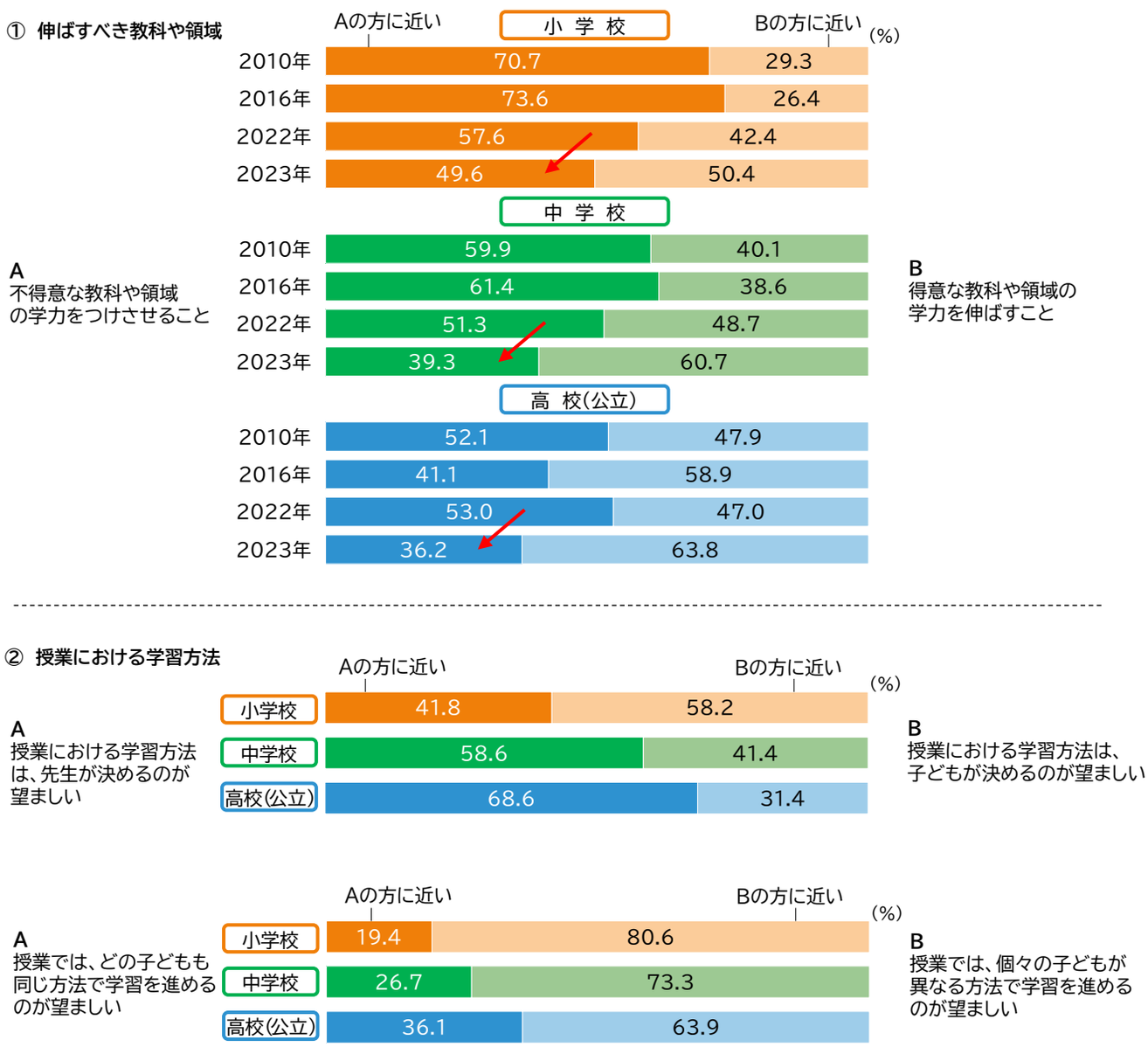
教員の指導観

不得意な教科や領域の学力よりも、得意を伸ばす指導重視に

2010年から2023年にかけての大きな変化として、小・中・高校とも、「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」を重視する比率が減少し、「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」が増加した。その結果、「得意」を重視する比率が５～６割台となり、半数を超えた（図3－３①）。また、授業での学習方法について、「先生が決めるのが望ましい」か、それとも「子どもが決めるのが望ましい」かを尋ねたところ、小学校では６割近くが「子どもが決めるのが望ましい」であったが、高校では「先生が決めるのが望ましい」とした比率が７割近い。一方、小・中・高校とも、「個々の子どもが異なる方法で学習を進めるのが望ましい」とする比率が６～８割台と高かった。低学年ほど、子どもに学習方法を委ねている様子がうかがえる（図3－３②）。

Q あなたは、授業や生活指導・生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。
各ペアについて、あなたがあえていえば重視していると思うほうを1つ選んでください。

図3－3　教員の指導観（①：経年比較、②：2023年）



※2010年、2016年の数値は「学習指導基本調査」の結果（p.4参照）。2010年の高校は公立の教員のみが対象のため、2016年、2022年、2023年も公立高校（設置区分が「公立」）の教員の回答に絞っている。数値は無回答・不明を除いて算出している。
※経年比較できる項目のうち、2022年と2023年の比率に５ポイント以上の差が見られた１項目を示している（図３－３①）。
※小学校は「生活指導の面で」、中・高校は「生徒指導の面で」と尋ねている。

教員が高めようとしている資質・能力

「基礎的・基本的な知識・技能」を高めようとしている教員は９割弱、「批判的に考える力」「ふりかえる力」は２～３割

高めようと考えている資質・能力を尋ねたところ、小・中・高校とも、約９割が「基礎的・基本的な知識・技能」を選択している。小学校は、「自分の考えをわかりやすく話す力」「自分の考えを文章にまとめて表現する力」「人と協力しながら、ものごとを進める力」がそれに続く。中・高校は、「根拠にもとづいて判断する力」「ものごとを論理的に考える力」の比率が高い。一方、「ものごとを批判的に考える力」「自分の学習のやり方やプロセスをふりかえる力」は、小・中・高校とも２～３割と低い（図３－４）。図３－５をみると、学校段階によって上位項目が入れ替わり、教員が高めようとしている力の優先順位が変化する様子がうかがえる。

Q　あなたは、授業を通して、児童・生徒のどのような資質・能力を高めようと考えていますか。

図3－4　高めようとしている資質・能力（2023年、学校段階別）

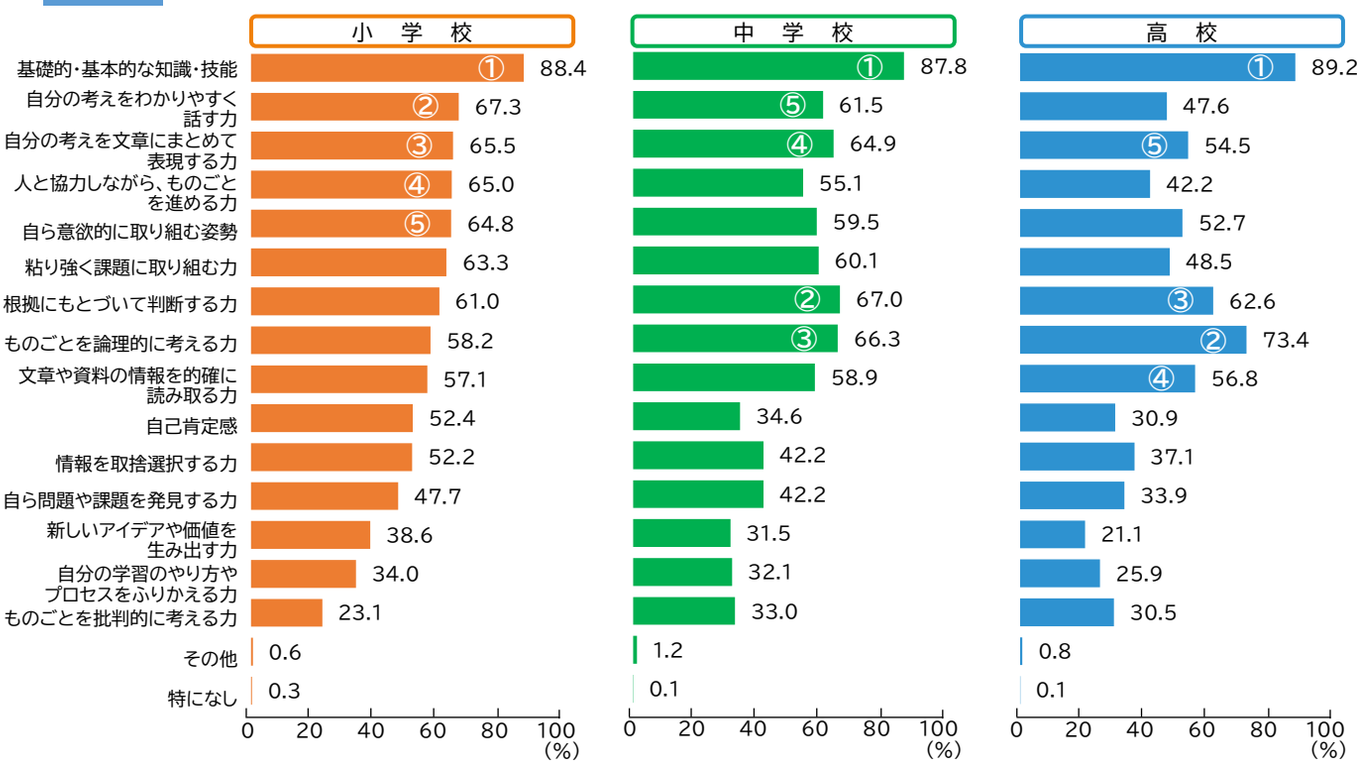
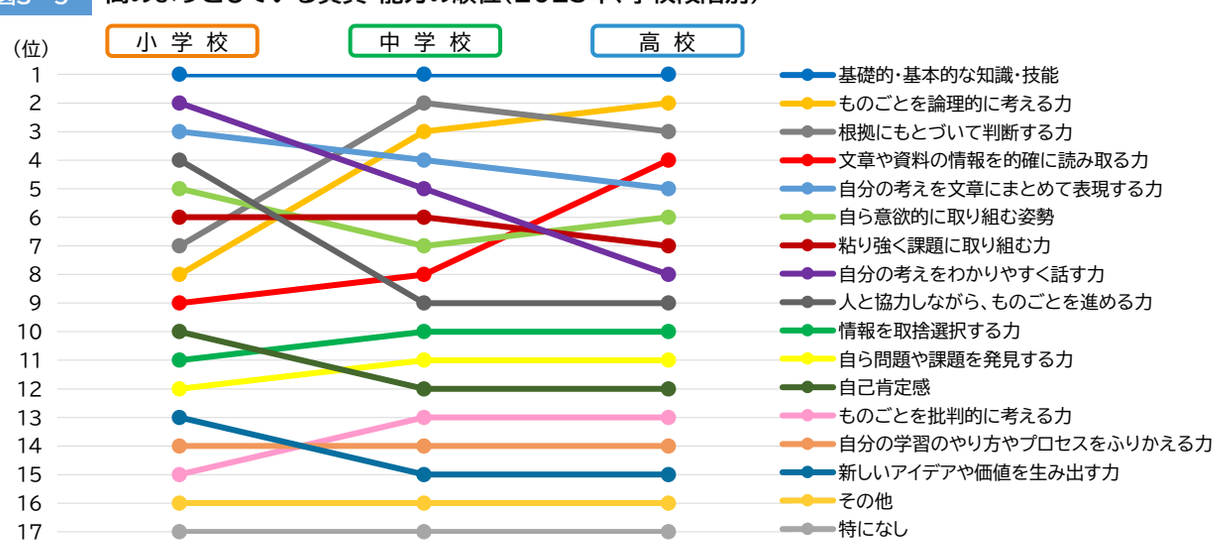


図3－5　高めようとしている資質・能力の順位（2023年、学校段階別）



※複数回答（図３－４、図３－５）。
※小学校の降順に並べている。学校段階ごとに、比率が高いものから順に①～⑤をつけている（図３－４）。
※縦軸は、学校段階ごとに、各項目の比率の順位を表している。凡例は、高校の降順に並べている（図３－５）。

教員が高まっていると思う資質・能力

高まっていると思う資質・能力は「基礎的・基本的な知識・技能」「人と協力しながら、ものごとを進める力」「自ら意欲的に取り組む姿勢」

高まっていると思う資質・能力を尋ねたところ、小・中・高校とも、上位３項目は「基礎的・基本的な知識・技能」「人と協力しながら、ものごとを進める力」「自ら意欲的に取り組む姿勢」と共通していた。しかし、小学校に比べると、中・高校では、「高まっている」（「とても高まっている」＋「まあ高まっている」）の比率が低い（図３－６）。また、「自己肯定感」「粘り強く課題に取り組む力」も、小学校に比べて、中・高校は、比率も順位も低い。これらの資質・能力を高めることは、高校生（高学年）ほど難しくなるのかもしれない。一方、中・高校では、「根拠にもとづいて判断する力」「ものごとを論理的に考える力」の順位が高い（図３－７）。

Q 児童・生徒の資質・能力は、あなたの授業を通して、どれくらい高まっていると思いますか。

図3－6　高まっていると思う資質・能力（2023年、学校段階別）

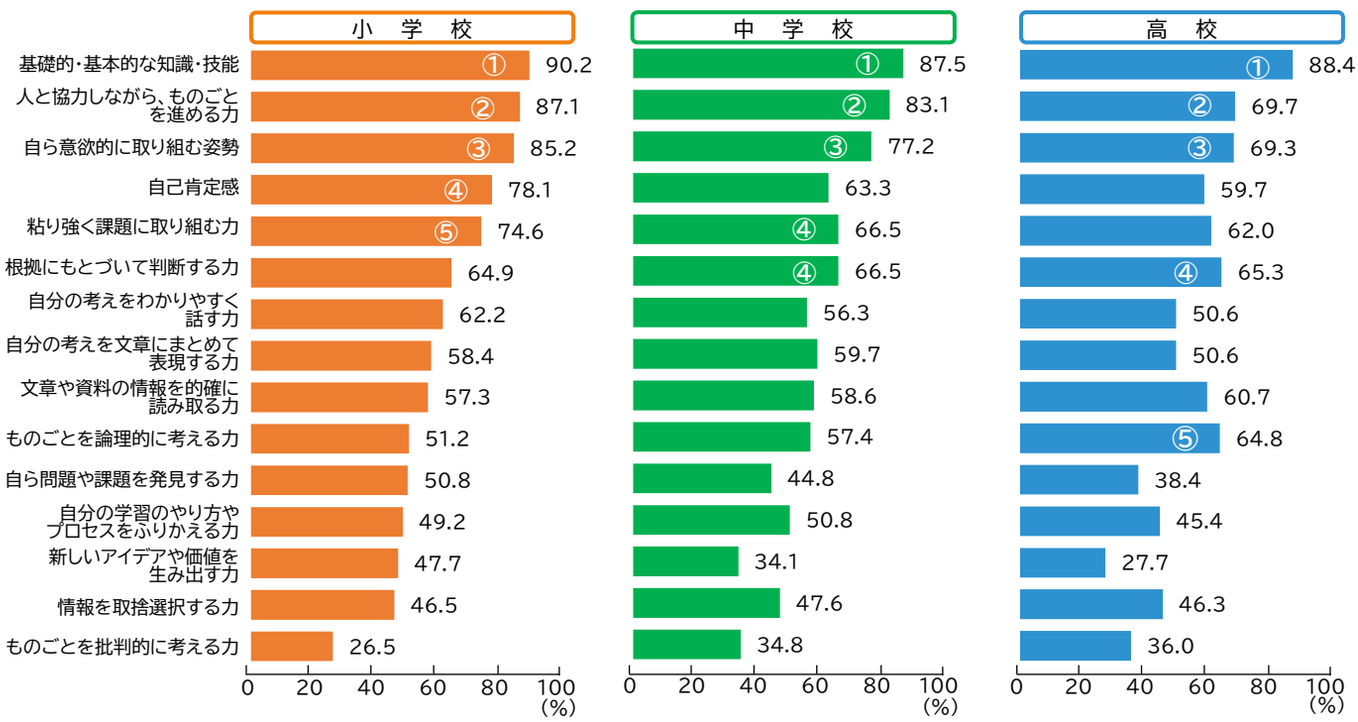
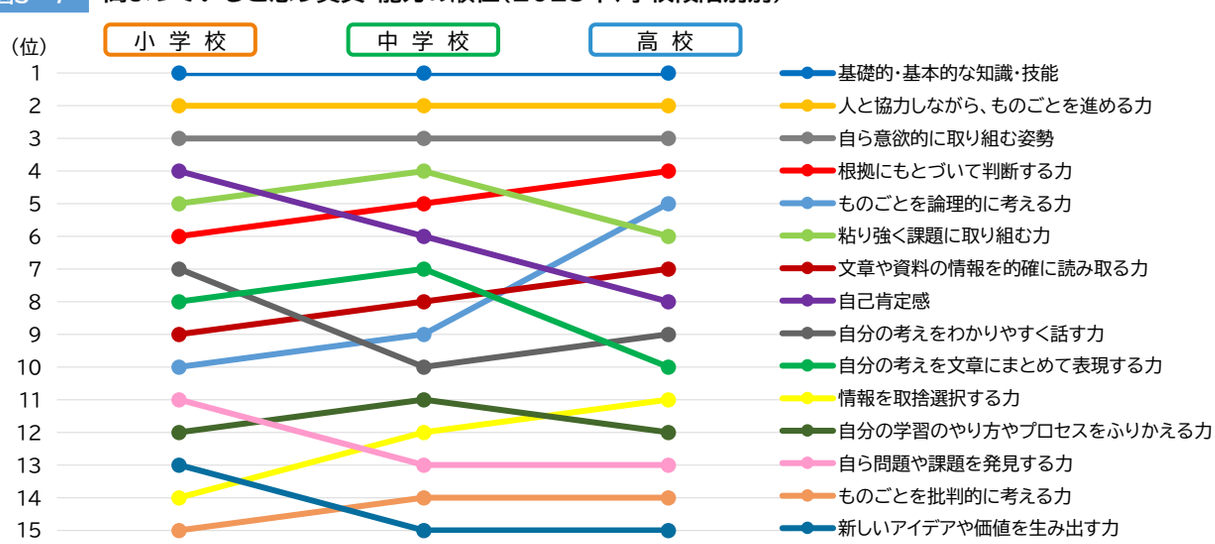


図3－7　高まっていると思う資質・能力の順位（2023年、学校段階別別）



※「とても高まっている」＋「まあ高まっている」の％（図３－６、図３－７）。
※小学校の降順に並べている。学校段階ごとに、比率が高いものから順に①～⑤をつけている（図３－６）。
※縦軸は、学校段階ごとに、各項目の比率の順位を表している。凡例は、高校の降順に並べている（図３－７）。

資質・能力を高めるための授業の工夫

子どもの主体性を引き出すことを目指した工夫が共通してみられる

教員は、児童・生徒の資質・能力を高めるために、授業でどのようなことを意識したり、工夫したりしているのだろうか。高めようとしている資質・能力の上位である「基礎的・基本的な知識・技能」（小・中・高校で上位）、「自分の考えをわかりやすく話す力」（小学校で上位）、「ものごとを論理的に考える力」（中・高校で上位）と、高まっている資質・能力の上位である「自ら意欲的に取り組む姿勢」「人と協力しながら、ものごとを進める力」について、自由記述を取り上げて示した（図３－８）。対象とする資質・能力や学年によって、教員の意識や工夫は異なるものの、子どもの主体性を引きだそうとしている記述がみられる点は共通していた。

Q あなたは、前問で選んだ1番目・2番目に高めたい資質・能力を高めるために、どのような授業を行っていますか。
※特に意識している点、工夫している点などを具体的に教えてください。
※例えば、子どもの主体性、進度や興味・関心に応じた指導、集団での学び合い、ICT機器の生かし方などを含めて教えてください。

図3－8　資質・能力を高めるために授業で工夫していること（2023年、学校段階別）

1.　基礎的・基本的な知識・技能

- 「まずは教師主導により考え方や操作方法などをしっかりと教える事。これをやらずに最初から児童に投げてしまうと、わからない子はずっとわからないまま。ただし教師主導は10～15分程度に収め、その後は個々でじっくり考える時間、教え合う時間などをしっかりと確保している。」（小学校、４年生担任）

2.　ものごとを論理的に考える力

- 「課題に対して、仮説を立て、検証する実験を自ら考え、実験方法について小集団で検討する。自分たちで考えた実験を行い、結果から仮説と照らし合わせて考察するようにする。学んだことを日常生活とつなげて振り返る活動を行う。」（中学校、理科担当）
- 「教師の説明に頼るのではなく、必ず自分自身で読み、読みとったものを文や図表で表現させる。また、その妥当性を互いに検討させる。」（高校、国語担当）

3.　自分の考えをわかりやすく話す力

- 「テーマに沿って、自分なりに興味や関心をもてる話題や題材を選び、ICTを活用して情報収集し、写真や資料を示しながら発表する授業を、単元のまとめの活動として行っている。自分の頑張りを振り返るだけでなく、級友の発表を聞き、参考にしたい表現や発表の仕方を次回取り入れるよう助言している。」（中学校、外国語担当）

4.　自ら意欲的に取り組む姿勢

- 「児童の生活体験や興味・関心に基づく課題設定、児童にとって必要感や必然性のある課題設定、解決したいと思わせるような課題設定の工夫・明確なゴールの設定（教師主導ではなく、児童と共に設定する）。」（小学校、５年生担任）
- 「学習の過程の明確化（単元計画を児童とともに作る）。」（同上）
- 「個での学び⇔集団での学びを行き来する（アプリを活用した意見の共有／類似、相違などを見つけ認め合う活動や、よりよい解決法を共に考えるための話し合い）。」（同上）

5.　人と協力しながら、ものごとを進める力

- 「わからないことが『わからない』と素直に言える雰囲気作りを意識している。」（小学校、５年生担任）
- 「生徒同士が自然と関わり合い、課題解決に取り組む授業を目指している。分からない時には近くの仲間に質問し、相談された相手はどこまで相手が理解しているか把握した上でアプローチする。課題を完了した生徒は、自分の考えを仲間に伝えることで知識のアウトプットを行い、理解度をさらに高める。こんな姿を目指して指導している。」（中学校、数学担当）

※１番目・２番目に高めたい資質・能力として選択された項目ごとに、授業で意識していることや工夫に関する自由記述をピックアップした。
※「その他」を除く資質・能力の15項目のうち、選択率の高さや因子分析の結果を踏まえて、５項目のみ示している。
※自由記述の末尾にある（　）内は、教員の担当学年や教科を表している。

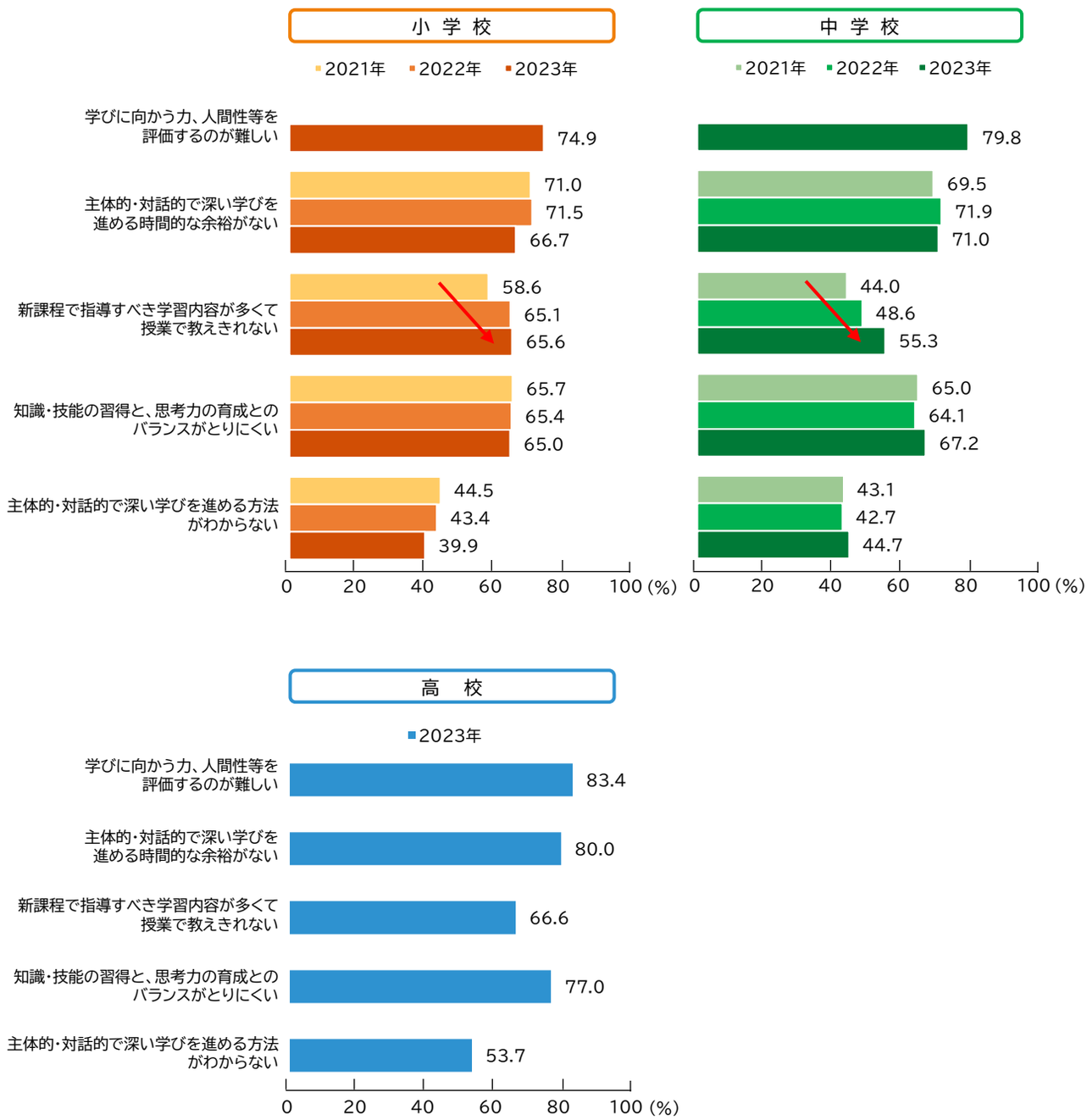
指導について

５～６割台の教員が「指導すべき学習内容が多くて授業で教えきれない」

学校段階によらず、７～８割の教員が「学びに向かう力、人間性等を評価するのが難しい」に「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）と回答している。また、「主体的・対話的で深い学びを進める時間的な余裕がない」については、小・中学校では「そう思う」が７割前後であるが、高校では８割と高めである。2021年からの２年間では、「指導すべき学習内容が多くて授業で教えきれない」が小・中学校で増加し、中学校ではここ１年間でも５ポイント以上増えた。また、いずれの項目も、高校の比率が小・中学校に比べて高い。教員の指導上の悩みは改善されていない。

Q あなたが担当する教科の授業で、次のことをどれくらいそう思いますか。

図3－9　指導に関して思うこと（経年比較）



※小・中学校の「学びに向かう力、人間性等を評価するのが難しい」は2021年、2022年は尋ねていない。高校は2021年、2022年は尋ねていない。
※「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。

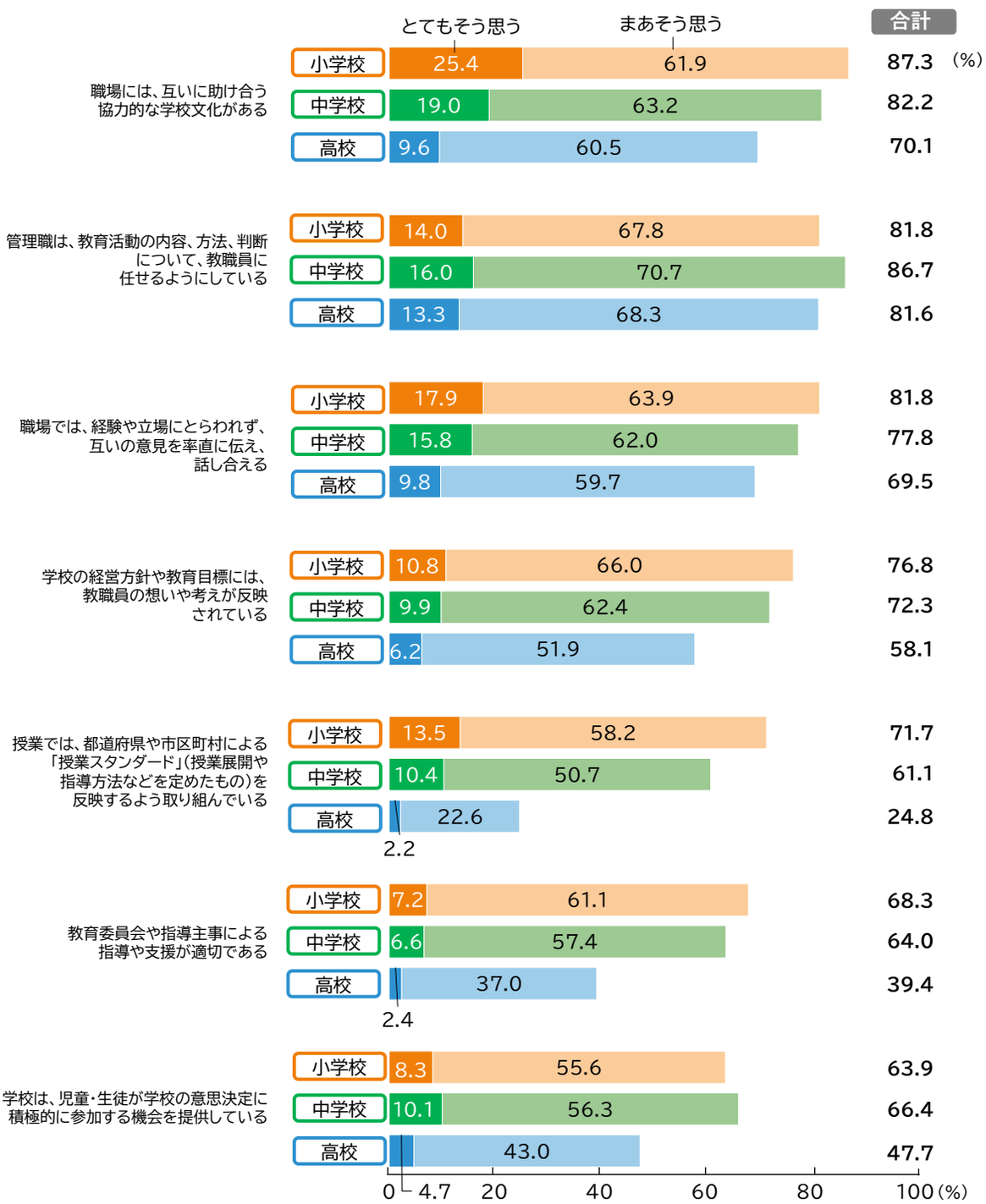
組織について

７～８割台の教員が「互いに助け合う協力的な学校文化がある」

学校の組織に関して尋ねたところ、「管理職は、教育活動の内容、方法、判断について、教職員に任せるようにしている」は、小・中・高校とも「そう思う」（「とてもそう思う」+「まあそう思う」）の比率が８割台と高い。他の項目は、中・高校よりも小学校の比率が高いものが多く、学校段階によって組織の状況が異なることがうかがえる。「互いに助け合う協力的な学校文化がある」「互いの意見を率直に伝え、話し合える」は、小学校が８割台で、同僚との良好な関係がみられる。また、「学校は、児童・生徒が学校の意思決定に積極的に参加する機会を提供している」は、小・中学校が６割台、高校が４割台で、今後さらに児童・生徒の参加の機会が増えることが期待される。

Q あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

図3−10　組織に関して思うこと（2023年）



仕事について

９割前後の教員が「作成しなければならない事務書類が多い」

学校段階によらず、８～９割の教員が「作成しなければならない事務書類が多い」「授業準備の時間が十分にとれない」に対して「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）と回答している。特に、「作成しなければならない事務書類が多い」は、小・中学校では９割強、高校もここ２年間で増加しており、業務の削減が進んでいない様子がうかがえる。「休日出勤や時間外勤務が多い」「仕事で精神的に疲れている」も７～８割台と高い。また、「児童・生徒と向き合う時間がとれない」は５割前後であり、「学校内外で自分の学びのための時間が確保できている」は３割台にとどまる（図３－11）。ただし、これらの状況は職場が協力的かによっても異なるようだ（図３－12）。

Q あなたは次のようなことについて、どれくらいそう思いますか。

図3－11　仕事に関して思うこと（経年比較）

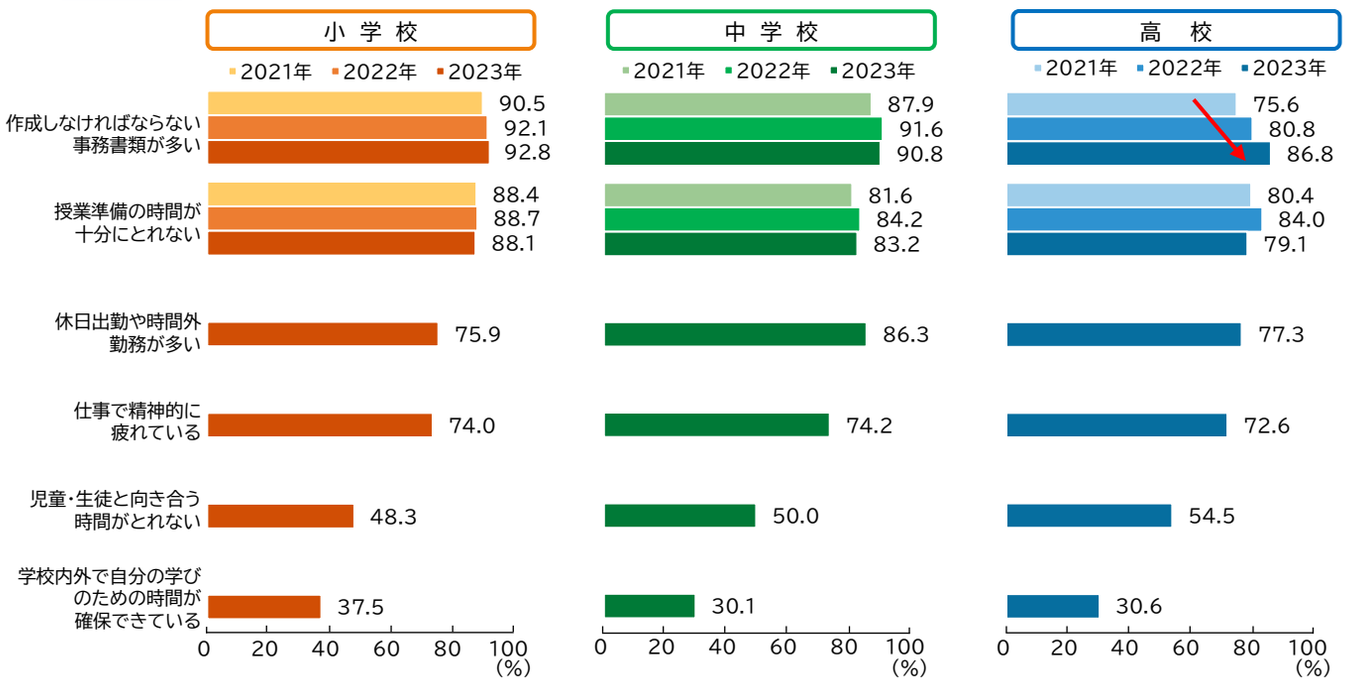
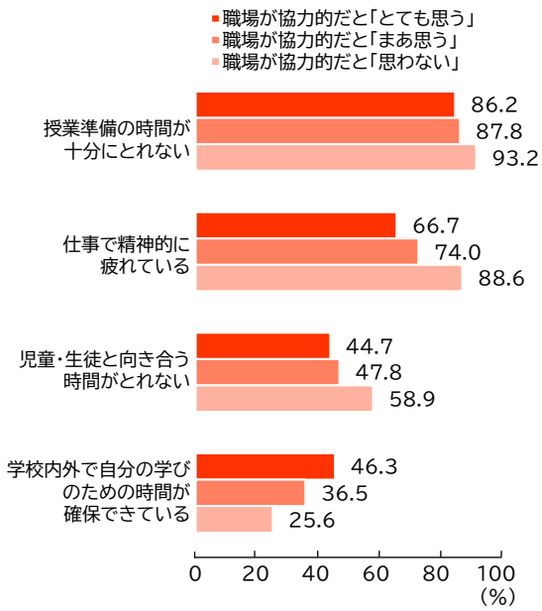


図3－12　仕事に関して思うこと（2023年、協力的な学校文化別）小学校



※「休日出勤や時間外勤務が多い」～「学校内外で自分の学びのための時間が確保できている」の４項目は 2021 年、 2022 年は尋ねていない（図３－11）。
※「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％。
※「協力的な学校文化別」の「とても思う」は、p.34の「職場には、互いに助け合う協力的な学校文化がある」に「とてもそう思う」と回答した教員、「まあ思う」は同じ項目に「まあそう思う」、「思わない」は「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した教員（図３－12）。